





黒岳天狗より雲海に浮かぶ由布、鶴見岳

もくじ 後立山を歩く 千灯岳 2 3 文殊山、両子山 走水峠から横岳へ 4 泊めぬ宿 5 7 映画のご案内 四〇周年記念誌原稿募集 お知らせ 7 後記

の広場にもマイカーがあふれて、今回の山行は、二泊とも山小りはほとんどテント特参だったの場には直径がされることも多かった。 を急かされることも多かった。 を急かされることも多かった。 を急かされることも多かった。 を線までの柏原新道は急坂のと、まず立とが見え隠れしている。そのと、まず立とが見え隠れしている。その名にはすぐ手前に双耳峰をととる。をとはすぐ手前に双耳峰をとる。をとる。を経れて、からはすぐ手前に双耳峰をとる。を済ませ、毎世の予定はである。その名と、を済ませ、毎世一ルを飲い。本日の予定はである。その名と、を済ませ、毎世一ルを飲い。本日の予定はである。その名と、の名には、知るとは下るだけ。ガレ場をとして、の名には、知るとは下るだけ。ガレ場をとして、方とは下るだけ。ガレ場をといる。 をとる。を済ませ、毎世一ルを飲いませ、毎世、カレールを飲い。本日の予定は関係をとしている。 をとる。を済ませ、毎世一ルを飲いませ、毎世、カレールを飲い。本日の予定は関係をとしたがしてります。 泊荘の望中し岳沿と横だ山木登

めトのは 0 宿晴 もマイ野の扇沢 駐 場。 J は早R があふれている。 朝信 C E 車 でった町 杯が前 扇か 登沢ら のテはまで 山ババ ロスス

・カスと暑い九州を出て り、今年も七月末にかねてより がこのところのに のがこのところのに 晴天が続いており、大雨続きであったが、中は梅雨明けしたといる 大日う より念を恒子 市ま着部年 内で快た北何 願とメー

七は故

明天が続

初日の離

れた八

の三二

日

17 Ш を 歩

後

高 橋 後高 利 田 市

ット前 なし。以前たどった白 なかった。 まで行き一休み。 G 5 2 が不足しているのだろう売って なく、スムーズに通過できた。 では、急な下りであるが、キレ 番の難所である八峰キレットま てしまった。北峰から今山行一 できてなく、 ころ、不調で巻 終ったので巻戻し操作をしたと かう。北峰で写真のフィルムが りを経て片方のピーク北峰へ向 展望を満喫する。続 士山、八ヶ岳も。三六〇度の と大きい。 も軽くなる。 には黒岳 今日 つかピークを越えて 奥に槍、 |槍南峰 (主 休止したが、この小屋では水 れるような空だ。五 八月二日、早朝起きて御来光 下った ガスで 0) 近く見えた。 黒く見える。 部に建つキ 後では幸 0) か。 吐もかなり混んで 五竜岳への で、奥 目を移せば遠くに富 態とまでは 泊 れているピーク付 に頃から五元の五元 大部分を感光させ 峰)到着。 薬 清々しく足どり 師岳 引山を過ぎ、鹿 好天を約束して いにも対向者が 戻しが完全には 針ノ木岳 展望 の三角点 レット小屋で Ŧi. いて急な下 がどっし いくが、 んで 馬三山 竜岳 登りは 時丁 ならず、 竜 竜 は 岳岳 申 華 山山 0 分 大 下るテレキャビンは、アルプスな。五竜とおみスキー場の中をあい立山、剱岳方面の見納めであり、 まで時間があったので、再び信中の小道を歩いた。帰りの電車は、ペンションが立ち並ぶ林の

ボ 道

ンが濡れる。小遠見山を過ぎ には笹が多くなり、夜露にズ

サニー

に

到

荷物を車

田さんと落ち合っ

すぐに出

発。

金中別府

食をとっていた。大遠見山、ケ池塘があり、ほとりで団体が朝 えない。更に下ると残雪のある 0 遠 屋 H 鹿島槍の山頂付近はガスで見チャンスを待っていた。しかて鹿島槍北壁方面のシャッタ 見尾根 てから のすぐ前の白 ピークである西遠見 o N 草く出 氏がカメラの三脚を立 の下りにかかる。最 岳へ一旦 日 で 山で今 日也 登 朝初 を

から鹿島 大きく望まれ など後立山の峰々がひ 槍、 0 Ш 五 た。 行で歩いた爺ヶ の峰々がひときわれて生いた爺ヶ岳

月月 例 Ш 行 報 告

佐

秀

お手

寺は、思いの外綺麗で、ログ前の新館に泊まることになる。

灯も

ま今のの 今回の山行は、前泊でお寺に泊とで参加人数も六名と少ない。 る。ブッシュの中を行くとのこに集合。今回から国東半島に入 月 + 九 午後 六時 サニー

ルンの立つ中遠見山を過ぎ次

高度が低くなったためか、沿ンの立つ中遠見山を過ぎ次第

分で大鼻 田さんの ると、 狭い。 が しながら 方山す 「香から」 寺へ向 広くなり、 が綺麗になったものだと感心 面 夜だったので通り過 動 両子寺をすぎておよそ十 昔 寺へ。 入り 山口の小さな標 から。ここから再び 車を置いて、一台で不 飯 のままの道 走る。両子寺近くにな 道は広く二車線道路。 国東半島に入り両子寺 およそ十五分で不 口 がある。ここに 道十号線を上り 路で道幅が きると があ 道

링

事件の切れたザイル等、本では悪高東壁のナイロンザイル切断雷のビバークの直筆の手帳、前物館に立ち寄った。松濤明の風物館に立ち寄った。松濤明の風物館に立ち寄った。松濤明の風

下った。JR大糸線神城駅まで

八○○メートルを僅か八分で駅から麓の遠見駅まで標高差

約 平

物 4

し込読

み上げるものがあった。

窓

は午前二時四十分。寝たの西さんの声で目が覚めた。

っとー」と

6 間 5

124

寝たのが

時

ここで

朝食

夜の夕食が胃に

0

お橋

いたが、胸にジー

シと

事

到 着。車 足らずで、 十台 トイレも 11 止めら

ある。ここか

られるスペ

そして、 れたら、 お 0) 寺は、新旧二つの建物があり 段が着 た参道 岩にちょうど足がお 今夜は、 車場からおよそ十 その先にお寺があ お寺の いて階 を登る。大きな岩が 段になっている すぐ手前だ。こ 寺で 分。整備 ける程 を 取 3. 現

もあった。お寺の入り口からは、と値札も着いていた。押入には、けなどが置いてあり、しっかり と値札も着いていた。押入には、より、教典、ローソク、おみくいた。仏壇には、賽銭箱はもといた。仏壇には、賽銭箱はもと 何ともに より、教典 協ったが、 なったが、 がにお寺で酒盛りするのは気が然酒盛りになったのだが、さす食の準備をして食事をした。当 ハウスみたいな感じだ。電 とも幻想的である。早々に夕の中に山影や別府湾が見えて ソクを使わせていただ 電 源がわからず、仏

教典を買ったりした。最後に高みんなそれぞれ賽銭をあげたり 願して合掌。その後すぐに床にお礼と、明日の山行の安全を祈橋さんの「般若信教」で一宿の教典を買ったりした。最後に高 けていたので、食事の最後に おぼつかない。 3 つお覆 が付けらい は、一 網が破 い被さる草 れて、

まで戻った。お寺に着いた頃出した。リュックはお寺に置出した。リュックはお寺に置 物を片づけて は、荷物 具を着てすぐに 雨 発すると言っていたが、本当 1I けたま 足はさらに激しくなった。 発するとは思 を車に けて、 れた。 ま出 V 発 不要の だった 積へ向に の準 出 わなかった。 発。 へ向 ただ後、引き なの荷物を車 が向かった。寝 着いた頃 から 3 時 n に出四

〇分出発) 時ゆるか やかけ 夜と雨で足下 な尾根 る。 お 道 寺 から を

が付けられている。ところどこついた。このあたりから山道についた。このあたりから山道に から約五. かりづらいころで が切れたあたりで大きな岩に向きに緩やかに登っていく。 だ。山道は、網に沿ってややるため歩くときには注意が必 を る。ここで道 先発組 探す。すぐ手 ぼつかない。さらに、参道 た。周り 岳の い。ここから、 右 折 は がなくなっ L なけ まだ 前 登っていく。 足下に落ちて 部 視界を遮る。 12 0 暗 九 小さな岩 開で、 ばなら た。道 で網左要 41 12

2

りで、 植林の 林、左手は植林。あたりを探がわからなくなる。右手は自い四十分ほど昇ったところで、い が巻かれているが、伐採の合図杉の木に短い間隔で赤いテープ 坂をさらに登る。十分程度で坂 道が見つかり、植林を抜け、急 探すことおよそ二十分、やっと らしき半透明 と歩かぬうちに再び道を失う。 図らしい。道は突然左に向 印。どうもそこで左折をする合 ていると、一本の木に二つの矢 は二歩下がることもしばしば。 が緩やかになり始め、しばらく すると千燈岳頂上に到着した。 ここから、 わからなくなる。右手は自然 っているのと、 進む方向がわからない。 足下は 中に入る。しかし、五分 ほど昇ったところで、道 ののテー ゆるみ三歩進んで まだ目が りになったも プがあった いえかなり 進まない。 いて 覚

り遅 沿って って小休止。この頃には、雨も 広く今までの急坂が (六時二〇分着) 頂上 一がり、 不 間 れた。 程 動 からは と道 の下りとなる。登つてき いつも 度で到 寺からおよそ三時間、二 空も 頂 に迷ったことでかな み左方 水谷 の尾根に二十メー 明るくなっていた。 の今西流万歳で祝 上付近は思いの外 着する予定だった 峠へ町区界に 向へ曲がる 嘘のようだ。

> 五分で、 登り同 意が必要だ。方向は、千 がかりに下っていく。およそ十 るのを防ぐことができる。坂は で、とんでもないところに降 H から南東にある小さなピークを 指 V) す。このピークを通ること n けがわ 様の急坂で、テープを手 かり 様く クを通過 U ので、 する。 燈 Ш 頂



(千灯岳山頂にて)

歯がゆ から再 を十五分ほど登り、 止して、二度 るとやがて、 下りだ。坂 The E 足 今までの登 ピークを目指して登る。登 たら程なくピーク が滑る。なかなか前に進まず 息。やっと目が覚めた。ここ ークを過ぎると再び急 い思 び五百二十七メート いをした。再び急坂 りよりは 加 (目の朝 緩やかになってく 鞍部に着く。小休 は坂が緩いが. 坂が緩くな に着く。 食。ほっと 坂の 16 0

ろさを

あ

むといった感じだ。頃していらよりは、芽が茂っており、

頂上に潜り込

頂上付近

万歳を

(頂上

到着七時

でおり、頂上に立時○○分)頂上に

軽く整備

、三十分休

峠 を

「低山なんか」と思っている方

コースを歩

の岩の間を抜けて、 向けて下る。さらに < , . 道となり、造林地へと入る。小急坂を抜けると、緩やかな尾根 が見える。ここから造林地を斜ピークを抜けると、左手に道路 必要だ。わからなくなったら、 はっきりしていないので注意が 雰囲気を醸 いる。この日は、雨の影響で周 こが水谷峠である。(一〇 め前方に抜け、道路に出たらそ 左の方向へ進むといいだろう。 さらに坂は急坂になり、歩きに ッシュ。思いの外歩きにくい。 下り始めると道なき道を進むブ ピークとは異なる雰 けて下る。さらに大きな二つ 霧が立 がいくつもあ 尾根道とは し出していた。登 がけて、 ちこめ 長ほどの高さの 着)ここの から水谷峠 いえ、尾根が 尾根を下る 、幻想的な 囲気をして ピーク かの 1)

今回 ひとし 山行はここまでとし、「あかねに時間がかかったので、今回の雨や道に迷ったことで、予定外 ちは、千 とになった。「あかね温泉」 温泉に入って帰ろう」というこ いてきた稜線も見えて、感慨も る予定となっていたが、 分水谷峠着) 3予定となっていたが、前半のここから、さらに文珠山へ登 、の山行された。 燈 111 わせてくれた。もしては、低山のおもし が正 面に見え、 おもし 歩か

> フで いてみて 渠 しめると思いま いただきた 結 1 構

加 佐藤 者 飯 高橋 田 6



九 月月 例 山 行 報 告

藤

秀

成 < 同じメンバ 九月 一で、 別府で + B 飯 田 後 前

時

山の下山口となって走水峠に向か んと落ち合って、時サニーに集合。 床につ もあったが、午後十し、テントへ避難の に行わ 国東 て置いた。テントを水谷峠から点となる水谷峠へ三カ所に分け して、最後の一台を今回の出発 道に、もう一台を大鼻峠に、そ 山の下山口となる走水峠先の林 った林道入り口に張り、今夜は国東町寄りに百メートルほど行 ここで宿泊。恒 町 n 0 た。途中で雨が降り 菅さんも加わり かう。一 例の宴会には、 4 時には 回は ハプニング 台を両 盛大? 車三台 111 7

坂も緩み頂上が近いことを感じくなってきたところで一休み。

休み。

る。およそ十分で頂上に着

いた

急坂をぐんぐん登る。尾根が丸林地に入り込み、およそ二十分

ものが見えてくる。ここから植

いに少し歩くと、尾根らしき

た方向 道なき道を進む。ここら一体は登山道はなく、いきなり藪の中、てて引き返し、程なく無事発見。 ず、行き過ぎてしまった。あわテープが巻いているのに気づか 登り、峠に車を置いて、昨日来過ぎに出発。いったん水谷峠へ 沿るい。 登り口から南東の方向にある尾いているのか見当がつかない。 この日は、まだ薄暗かったこと およそ二十分平 根を目指して歩く。登りだして もあり、 た二つ目のカーブの左手にある 峠からおよそ二百メートル下つ 食の後テントを片づけて、五 眠れなかっ 植 月十六 へ道 林 登り口にリレー登 地と自然林の境で、 一雨が降 路を下る。 ひと安心。 自然林の境で、境中坦なところに出 起きた 準備する。 登り口 単な朝 には Ш 11 3

うやら全く方向違いのようだ。 とにかくこの林道を下り、二十 どこにいるのか見当がつかない。 道を左にとり犬鼻峠を目指す。 かっている。さらに尾根道を進まないといけないが、南東に向 文殊仙寺の道だった。文殊仙寺 字がよく読みとれない。やはり 一気に下りると、分岐が現れた。 おかしいということで、植林を れていたので、間違えたようだ。 だ。ところどころテープが巻か 仙寺からの道に入りこんだよう 北を向いていた。どうやら文殊 やがて尾根道もなくなり、さら ないが、どんどん左へと向かう。 むと、右方向へ進まないといけ 気にしているようだ。南西に進 ックするとどうもおかしい。前 五分ほど降りると、坂が緩やか 坂は急になり、ぐんぐん下る。 あることに間違いないようだ。 に行くわけには行かないので、 に左へ植林に入り込む。この時 にいる西さんも方向が正しいか になり左右が広がる。方向チェ プが巻いてあるので、登山道で 道を下りきったところで、 ほどで民家が見えてきた。ど に出た。地図には出ていない。 岐から百メートルほどで、林 が頂上、右に文殊仙寺、左は 歩くと、尾根が現れる。テー メートルほど緩やかなところ 尾根がよくわからない。20 山する。登ってきた逆方向

もないところに出てしまった。路に出た。場所は成仏。とんで 7 を取りに行った。半分ほど歩い ラに乗せてもらって犬鼻峠へ車 歩く。途中で飯田さんが、軽ト 仕方なく道路を犬鼻峠目指して 口ほど登らなければならない。 犬鼻峠と文殊仙寺のちょうど中 たところで、 点。大鼻峠へは、道路を三き 峠まで車で行った。 飯田さんに拾われ 仏。とんで

利く。前方左の小高いところを 登っていく。 ここが町界だ。この尾根沿いに はっきりとした尾根道となる。 目 分)中は植林で、結構見通しが はいる。(犬鼻峠出発九時四○ り、そのちょうど中程から山に 道側に車が置けるスペースがあ る。峠の三叉路、両子寺からの へ。犬鼻峠から町界に沿って登 指して登る。登り上がったら 峠で食事をとり、次は両子寺

て、登るのみ。 からなくなり、ただ上を目指し 林している右側にちょっと道を のため尾根を進めなくなる。植登っていくと、途中、ブッシュ 細くなり、急坂となる。尾根を 歩きやすい。登るに従い尾根は 頃になると尾根もほとんどわ 避し、再び尾根を登るが、こ 最初は平坦なところも あ 1)

ならないと進めない場所を無理 とおよそ二十分。四つん這いに で 緩みよく滑る。急坂を登るこ 歩く。足下は、急坂の上に雨 右に左にブッシュをよけなが

> ブッシュもなくなり歩きやす わずか。五分ほど休憩し、 ここから台地を越え山頂へは後 北側の台地のようだ。ここで小 なって前方が開けてきた。 止。小竹さんが不調の様子。 やっと坂が緩やかに 出発。



(両子山頂でのヤホー)

復せず、再度休憩。後は二つの側を進む。小竹さんの体調が回 やがて台地に出て、町界の尾根 るが、ちょっと坂を上ったら頂 トの舗装道路に出た。道路は山 十五分ほど歩いたらコンクリー 分ほど休んで、出発。尾根道を されていて、広々として明るい。 頂に続いており、やや興ざめ ピークを越えるだけ。今度は十 む。前方の台地は、植林が伐採 根を台地の方へ向かって進 (両子山頂着一一

で暑くはなかったのだが。 だりの天候不良だった。おか 回に続いて、雨が降ったりやん 時三〇分 「ヤッホー」をして、休憩。 ここで 山頂で、三十分ほど休憩して は霧に包まれて視界不良。前 いつもの今西 一流万歳

る旧郡界(東西国東郡界)を進 を登った所が三つの市町村界。 なる。軽い上下の後、小ピーク 急坂を降りると、緩い尾根道に 出来ており、道に従って降りれ む。この道は整備されており、 村)である。ここから南に延び たん小ピークに登る。そこから ばいい。最初坂を下って、いっ そのまま道路を両子寺へと下り と男性に別れて下山。女性陣は (国見町、豊後高田市、大田 性陣は道路から山頂手間のピ 山頂手前のピークからは道が 日車を止めたところまで歩く クまで戻り、郡境界沿いに、 竹さん体調不良のため、女性

い。あわてて引き返し、林道に るので、反対の林道に出たら うやら、ここは林道が両側にあ 全然方向違いで、二十分ほど歩 があったが、そのまままっすぐ途中一カ所わかりにくいところ いたら行き止まりとなった。ど まついていったが、この林道、 さんが降りていったのでそのま 先に右下に林道が見える。飯田 進めば支障なかった。その少し 実に歩きやすい。坂も緩やかだ。

で、女性陣と落ち合って、現地を取りに行って、両子寺バス停 到着。ここから車に乗って、犬い林道に出て、約十五分で車に いだったが、こんなところで大い林道に出た。ちょっとした違 変なロスをしてしまった。正し 5 い林道に出て、約十五分で車 歩くことおよそ3分で、 町界の道に戻った。ここか

醐味 (ちょっと大げさ) を味わではあるが、道なき道を行く醍に二度も出てしまった。 反省点 ではないでしょうか。 も大事に至ることは少ない低山 うことが出来た。道を間違って となった。とんでもないところ 楽しみ?の一つともいえるの 今回も前回に続き楽しい登

散となった。

参 加 者 飯田、石 Щ 小竹、

走 水 高 橋、 峠 佐藤、 から横 西

十月 月 例 Ш 行 報 告

Y T(ペンネー 4

明日の山行きを思うといささか にかかる頃から雨足が強まる。れの道を一路国東へ。別大国道 車三台に五人が分乗し夕暮 途中で迷子になりながら 日午後七時、 サニー

九時三 の中、 遅い夕餉となる。 のねぐら が合流するので早 にてテント 話ははずむが翌 のアンテナ 目 地の

1始めるが、眠いのでなかなか合図で慌てふためいて山支度 かどらな 翌朝午前 Ŧī. 西さんの起 床

四、五な三角点)儀式の万歳を記された標識の立っている四八紀がて走水峠到着。(走水峠と進むと登り初めて一〇分ほどで らみながら見れるものの苦 抜けて ヤブこぎと道 の行軍である。防火帯に沿って 分)。霧雨と風のなか雑木ををよ今日の登山開始(五時四八 つ次の三角点 車を三カ所にデポして 天気は のの荒 いく、目印を探しながら Ŧi. 1 道迷いを繰り返しつトの取り方を教わる。尾根の下り方、目的 峠到着。(走水峠と初めて一○分ほどで れ模 回復の兆しがみら 様。地図をに (杉林 到着 1 0 時一の ょ

帯に踏み 有名な山口 れる。 のためにも林業後継者 。 手入れの行き届いてい 世だから可 ながらのことだが たらさ た 可能な山口 ٧\ • 5 れる。グル 者 が植林 国 0 将来 土保 Ш 0

意気込みといい、当時としては場の悪い山頂まで運んで祝った日、朝来村有志一同と記されて日、朝来村有志一同と記されて あろう。それを見ながら話題に国をあげての慶事であったので 地帯、 馳せる。その横には大きな石 本の大煙突が も弾む。山 なったのが紀念と記された が建っており、「皇太子殿下渡 下がった所に苔む 疲れた自分へのご褒 いる。アルコールも介して話し 昔日の山への 望まれる。 佐賀関半島 信 した上宮があ 仰に思いを 美だ。一段 眺望も 顔 して 碑

る会員 下々の という説も飛び出したり。 紀」の字についてである。あ 者の場合と異なり正しい の説…紀元節の紀の方が った。

もない消息 ことら と磁石と地図で探すがなかなか三○六、○ほの三角点は高度計 設されているが、 見あたらない。稜線を林 目 昼食を終え、次なる三角点を して稜線を進む。地 滅することはよくあ 林道 一設にと が道が開 図上 0

りとなる。 花に迎えられ この日 ってヤブをこぎ、沢をよぎり あがる。 口の終点 終点で て後 咲き遅れ ははの ある んきな下 の彼岸 話伝にむ

直描 山頂頂 ま 下 での広 分場 まで車 0 登

に今日

い三つ

目

の三

点

た体をここちよい風が いつもいいものである。つかれ 跡を展望するときの充実 (横岳 山頂にて) ぬけてい 感

西、渡 松 加者 部 飯 田、 石 III 藤

泊 4) da

飯

田

までハガニ たとき 今 は蓼 年 0 警科山荘か山頂と力岳全縦走を終えのことである。この夏、網笠山から を終えて下山 ヒュ 蓼科 初 " 8) 0 Ш

> のである。 でも十分着けるだろうと言うの 入ろうかななどと考え始め、蓼 の日 に泊まるつもりで 少し飛ばして今夜は 定取りも 頂ヒュッテの小父さんに聴 の朝、縞枯山 軽く下 湯までならこれから 一荘を 山を開 あったが、 出るとす 温泉に 始 L

ある。

頂の展望台から今日

線を見

人はずいぶん早足らし ったが、ガイドブックを書いた から山頂までのコースもそうだ 三十分となっている。天祥寺平 四十五分かかっている。ガイド ると三時四十五 ブックのコースタイムは一時 いだつもりだが山頂から一時間 女神登 ロに 着いて 分。ずいぶん急 計 を見

刈り払われた草つきの、古い並ある古い道を下っていく。良く ほとんど平ら までぎりぎりのタイムである。 は三キロと書かれている。五 きな道と出会う。その三叉路に 二十分ほど行くともう一つの る。道幅は ばならないことがあるからであ衆電話で仕事上の連絡を取らね に着かねばならない。温泉の公 どんどん下る。五時までに親湯 道を時間を気にしつつ急ぎ足で 木のような木立の並ぶ緩い下り 塩を運んだ道と記された標識の 方面を示す 舗装道 はどうやら古 橋、天祥寺平方面への分岐 路を横切り、 次第に広くなり、そ 標識と、武田信玄が っている。 林道らしく、 蓼科温 机湯まで

コンクリートの橋を渡り、玄関派なホテル造りである。大きな う旅館の敷 道を降りて きた。そ と左手下方に赤い がて 山 向こうに大きなホテルが現れ ままなので、さらに行くと川 古い玄関風の入り口は閉じた のいでゆを想像していたが立 林道と分 るようにどんどん歩 地内のようである。 橋を渡るとそこは いくと古い建 屋根に向かって T 屋 根が見えて い道を下る め、さら た 0 4

を正面の総ガラス張りの玄関のれはぞうど、あちらへ。」と私 習い風の蝶ネクタイの若者が走に近づくと中から一人のまだ見 自分はその 大きな自 早く温泉に入りたくて。」「そ 山から降りたばかりで疲れて。 ですか?」「ええ、一人です。 るように出迎えてくれた。 一晩お願いします。」「お一人「お泊まりですか?」「はい、 から中にはいる。 動ドアの方へと導き 横の手 開きのガラス

るとはな にフロント ホテル ほぼ ザックを降ろしながら、 テンを胸 マンともう一人若 のロビーに入ると右 しに見ていると中 中央にあるソファのユエっている。私がロビ 36 あ り、三十前 11 後 女 2 Ľ

ントマ

前

で大きく両

して 0

『とんでも

顔つきで若者を見る。んできたな』とでも言うようなないお客をおまえは引っ張り込

まる余裕がないと言うんです 満室ですので…。」「一人も泊 言いながら人影のない広いロビ もかまわないんですがねえ。」 も満室で…。」「どんな部屋で 怒りの思いである。「はい、で る。あの胸の前のバッテンを見 かし心の中には怒りが沸いてく こちらはさらに下手に出る。し ぬばかりの言い方である。「奥 でるでそれ以上近づくなと言わ 空いていないんです。」とまる りで疲れていますし、だから、 どいないくらいに静かである。 のウイークデー、お客はほとん 気も、とても満室どころか今日 っているだけで、ロビーの雰囲 広い駐車場は車が数台程度停ま 言葉で慇懃に冷たく言う。前の にも迷惑げに、そして営業用の 突然訪れた薄汚い登山者にいか お泊めできません。」中の男、 ザックを降ろしてカウンターに た時からわき起こりかけてきた んです。泊まれさえすれば。」 の方の古い建物でもかまわない 近づきかけると「満室で部屋は いながら困ったような顔をして ただ風呂さえ入れれば。」と言 んです。山から降りてきたばか せんが、あいにく満室ですので 一、二歩歩きかけると「すみま 「あのう、どんな部屋でも良い それに気付かぬ風をして私 を見渡す。「ハイ、満室でも

さか怒りを口に出す。いと言うんですか?」私はいさ追い返すほど一部屋も空いてなか?この疲れて宿を求める客を

るかもしれない。朝からもう一 憩用のいくつかのソファやおみ 正直に言って脚はいささかグロ と思って頑張ってきた後だけに 二時間近く歩き続けで、蓼科山 みた。ここに泊まれなければ、 屋はありませんか。」と言って 定外である。「もう少し安い部 が。」「当方では二万円は頂き できるだけ安い方が良いのです らとは言いませんが、もちろん じゃないか』と思いつつ「いく 言葉。『何だやっぱり空いてる やげ品売場には人影はない。 私だけである。ロビーの奥の休 て若い女はそのときにはロビー ントマンと、外にボーイ、そし の大きなロビーの空間には、フ様子。しばし沈黙が流れる。こ 度は下を向いて何やら見ている 頂からただひたすら、親湯まで まだらんと歩いて下ることにな ませんと。」これはチョット予 マネージャーらしき男の慇懃な 算はいかほどをお考えで。」と の玄関の方にいたたが、それと U 私をじろじろ見て、それから今 ージャーからしい男が出てきた がった六十半ばのどうやらマネ T この時、このやりとりを聴 少し間をおいて、「あのご予 ントの中には禿頭の男とフロ いたらしく奥から頭の禿げ上 さらに長い歩きはも

「ここから歩いて三十分くらいずるだっくうである。「どのくらいならお持ちある。「どのくらいならお持ちちですねえ、山旅ですので、一万にはっとくらいなら…。」是得を切らですねえ、山旅ですので、一万ちょっとくらいなら…。」とというですねえ、山旅ですので、一万ちなに持っていませんので、一万ちなに持っていませんので、一万ちなに持っていませんので、一万ちなに持っていませんので、一万ちなに持っている。「蓼科温泉のである。「蓼科温泉のである。「蓼科温泉のである。「蓼科温泉のでする。「ぞのいちがいて三十分くらい蓼科温泉は遠いんですか。」

ですかねえ。」『しめた。』ですかねえ。でもまあいいか。行ってればバス停がありますから。」「五分ほど行けなった。」とその時例のバッテンのよ。」とその時例のバッテンのよ。」とその時例のバッテンのよっ」とその時例のバッテンのよっ」とその時例のバッテンのよっ」とその時例のバッテンのようである。」というながら、これた。こればかりのようである。

いた女性があわてて横に行き、いた女性があわてて横に行き、「公衆電話は有りませんか。」ですがありますからぞうど。」ですがに公衆電話は使用禁止ではないた分だ。私が近づくとその前にはった女性があわてて横に行き、

電話ボックスを出てザックの電話ボックスを出てザックのである。 私の靴に付いていたのだろう。 歓迎されざいていたのだろう。 ないないだんだん

いがこみ上げてくる。 『何が…、フン…。』と言う思 『何が…、フン…。』と言う思 で橋を渡りふりかえると見える

うちによみがえったのだ。 かってマイカーで真新しいヴィすでに三十年近く前のことだが い浮かばなかった風景が一瞬のこに着くまでは頭の片隅にも思 01 がよみがえるのを覚えた。もう る景色に、一瞬遠い昔の思い出 停留所の少し手前で窓から見え とりの停留所に近づいた。私は うにバス停があり、バスは四、 出た。その三叉路から直ぐ向こ い浮かばなかった風景が一瞬 十分足らずでバスは蓼科湖のほ 五分待つとやってきた。そして 分も行くと車の往来の多い道に 湖畔を歩いたことがある。そ ナスラインをドライブし、こ アスファルトの舗装道路を数

は誰もいない。「こんにちは」のカップルがいるがフロントにに入るとロビーに客らしい一組に入るとロビーに客らしい一組に入るとロビーに客らしい一組に入るとロビーになら。そう決めてだここで降りよう。そう決めて

そう、疲れているんでしょうね 良く「いらっしゃい、何人様で 三度と声をかけるが返事がない え。良いですよ。お泊まりなさ きたばかりなんです。」「あら、 笑顔を消したがその女性、「山 すか?」「一人なんですが。 ŋ ら、若い女性が愛想良く出てき 隣の土産品店に入り声をかけた 外に出て同じ建物となっている ルとは段違いの応対である。 くれた。さっきの格調高いホ とホテルのロビーへと案内して も入れますよ。さあどうぞ。」 入りたくて。」「温泉はいつで うございます。とにかく温泉に い。」「そうですか、ありがと に登るんですか?」「今降りて い旨を告げると奥に行き、か た。私が隣のホテルに泊まりた 声をかけても 中年の女性が出てきた。愛 _ テ 想わ 6

はもちろんのことである。 浴室の鏡を見ると日に焼けた で、三日半の山旅の思い出だと、不愉快な思いも薄らいでいると、不愉快な思いも薄らいでいると、不愉快な思いも薄らいでいると、不愉快な思いも薄らいでいると、不愉快な思いもすらぬでした。

浴衣を持って浴室へと急いだのに案内されると直ぐにタオルと

チェックインをすませ、部

(一九九九年八月)

映画のご案内 ダライ・ラマ

の半生

クンドゥン

うになりました。 題材とした映画が作成されるよ ルブッダ」とともにチベットを したか。九十年代に入り「リト ン・チベット」をご覧になりま ットした「セブンイヤーズ・イ ブラット・ピット主演で大ヒ

物語を書き上げました。 歳月をかけて史実を超えた魂の 部門にノミネートされた話題作 ウン」は九七年アカデミー賞四 夫人でもあります)が、七年の T」で脚光を浴びたメリッサ・ ツシュ監督作品で、脚本は「E です。巨匠マーティン・スコセ マシスン(ハリソン・フォード ストーリー(パンフレットよ 六日より公開される「クンド

0

奥に宿らせる。

十一月六日より十二日まで

でないものを彼の前に二種類ず マが愛用していた遺品と、そう 会った一行は、生前ダライ・ラ そこでハモという名の幼子に出 まれ変わりを捜し当てること。 去したダライ・ラマ十三世の生 れた。彼らの目的は四年前に逝 に長旅を続ける数人の高僧が訪 一九三七年、チベットの寒村

原

ン)』・・・ かけた。『法王猊下(クンドゥ 敬の念を込めてその幼子に呼び 一人の高僧が、やがて尊敬と畏 り上げていくハモを見ていた

れようとしていた。 その瞬間、一つの運命 者として

ライ・ラマという運命を踏みし の真実のかけらを、あなたの瞳 は、二一世紀を生き延びるため めていく感動作「クンドゥン」 間が、過酷な環境を生きつつダ わりなくこの世に生を受けた人 に流れていく。我々となんら変 から未来へと繋がる時間ととも スクリーンを大地に変え、過去 長を遂げて成人へと至る人生が 四世の、幼少から真の人間的成 今も生き続けるダライ・ラマナ チベットの最高責任 知せ下さい。

三・締め切り

お願いします。

四.提出先

:00 六、七日は九:00~ シネマ5にて二〇:四五~二三

一:一五

朝の上映もあります。

事務局(サニースポーツ)

東九州支部四 @ 周

知らせ。 〇年記念誌』編集委員よりお 日本山岳会東九州支部『四

お

知

5

せ

来年は東九州支部四〇周年 十一月月例山行

嬉々としてそのうちの一方を

画しています。 一環として記念誌の発行を計 にあたりますが、記念事業の

募集原稿

が生 #

二、海外登山報告 な投稿をお待ちしています。 絵、その他) 皆さんの積極的 各会員の投稿(随想 短歌、俳句、写真

活動状況、参加者名等)をお 目的の山、・ピーク、主な 概要(活動期間、 山をなさった方は、もれなく でとします。この間に海外登 から二〇〇〇年三月三〇日ま 対象は一九九〇年七月四日 地域・国

いますが出来るだけお早めに 二〇〇〇年五月末となって

まで 担当 安東桂三 097-568-

> 的 地 別府湾リレー登山ル ト。銭亀峠より鶴 について

見岳に向けて行ける

〇目

〇日 十一月二八日(日) ところまで。

午前五時サニー 出発

十二月月例山行 について

〇月 別府湾リレー登山ル ころまで。 山へ向けて行けると ト。鮎帰りより鋸

日日 午前五時サニー出発 十二月二六日(日)

重廣さんと歩こう

詳しい日程が決まりしだいお知 便で大阪へ 帰ります。 行縢山に登り、熊本空港の最終 十二月十八日(土) までに事務局にご連絡ください。 から延岡に入り一泊し、十八日 詳細はまだ未定です。十二月 重廣さんは17日に熊本空港 参加希望の方は十一月十五日 旬に日程が決まります。

> 0 とにしています。 会員で手分けした実施するこ め各山のルートの再点検等を 刊を計画しています。そのた 「大分百山」の改訂版の

○ 最近の月例山行の参加者が た方はどうぞよろしく。 び執筆について割り当てら **ひ執筆について割り当てられ事務局からルート照査、及**

報告をお待ちしています。 聴いていますが、秋の山行の 今年は紅葉が少し遅いとか

K

日本山岳会東九州支部報

1 9 9 9 (平成1 年) 10月31日

発行者 編集者 発行所 梅 木 秀 飯 田 勝 〒870-0021 梅飯 徳之

市府内町1-3-1 サニースポーツ内 大分市府内町1 6 西 孝子方 TEL · FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八